

弟から教わったこと

高知県立幡多農業高等学校

一年

吉本

愛佳

私が小学五年生の時、年の離れた弟が生まれました。
た。

私一人だけ出産に立ち会わず学校へ行き、帰ると父から電話で「生まれたよ」と報告を受け、思わず頬がゆるんだことは、今でも鮮明に覚えています。私と同じ低体重児として生まれた弟は、一ヶ月間の入院のち、我が家にやってきました。五人になった家族でのお出掛けや、三人になったきょうだい。「大きくなったら何して遊ぼうか」と考えることは、私の大きな楽しみになりました。だんだんと成長し、大きくなった弟に、父と母が不思議に思うことができたのは私が中学一年生、弟が二歳になる前の頃だったと思います。同じ歳くらいの子どもたちが自然と身につけていったもの、言葉が一つも出てこなかったのです。心配した両親が、病院で診てもらおうと、成長が年齢に追いついていないと言われたそうです。そして去年、四歳の誕生日を迎える前に「自閉症」だということがわかりました。

「どう？自閉症に見えんろ？」
弟が自閉症だということを知った

のは、弟が一人で遊んでいるところを見ながら言った母のこの一言でした。とても悲しそうな顔が、印象に残っています。医師から直接「自閉症」だと診断を受けた父と母がその時どう思ったのか、私には想像もできません。

自閉症だとわかってから、私は自閉症について調べてみました。するとまず、第一の特徴として弟にも見られた言葉の遅れ、その反面、記憶力、特に視覚的な記憶力に長けている、とかかれています。そして、多動性があり、自分の思い通りにならないと感情が大崩れするという症状があるそうです。

たしかに、大きくなっていくにつれて周りとは異なった行動が目につくようになりました。例えば、納得がいかなかったり、自分の言うことを聞いてくれないと大声で泣いたり、特定のものしか食べないようになりました。今年から弟は保育園に通い出し、「嫌」「やった」「おいしい」などの簡単な言葉が出てくるようになりました。

その保育園でも、給食を食べることはなく、「嫌」の一点張りで、一人だけ別メニューだそうです。私はこれが、弟だけの「ルール」なんだと思っています。今この社会では、自閉症の人たちの「ルール」を受け入れ、理解してくれる人ばかりではありません。

好奇心の目を向ける人もいると思います。そう考えると、とても悲しくなってくると同時に、どうすることもできない自分を不甲斐なく思います。一度、特別支援学校の先生を母に持つ友人に、弟が自閉症だということ話を話したことがあります。するとその友人は、

「自閉症だからって、他の人たちがうところなんか一つもないし、できないことがあるなら私たち健常者が助けて、補えばいい」と言ってくれました。ただ心の整理がついていなかった私にとって、肩の荷が一気に降りたような一言で、ほっとした瞬間でした。もっと弟が大きくなって、難しい言葉がわかるようになったら、聞かせてあげたいです。

ひとくりに自閉症といっても、人間に個性があるように、性格や特徴、自分に適した「ルール」は一人一人ちがいます。だからこそ、見ただけではわからず、想像しづらいことも相まって、理解や支援が難しいのです。

身体的な障がいのある人には、車椅子だったり、杖だったり、補助をする様々な道具があります。見た目ではわからない自閉症の人たちにとってのそれは、周りの人みんなの理解と手助けなのではないかと思います。

中学校の社会の先生が、「障害」の「害」はひらが

なで表記するべきだという意見が強まっているという話をしていました。その時の私は、読めば一緒だから、とそんなに深く考えませんでした。今、改めて考えてみると、その通りだと思うようになります。なぜなら、私たちが助け合って生きていくのなら、害や妨げといったものがあっても一緒に乗り越えていくことができ、そしてそこにはもう「害」は存在しなくなるからです。なぜ障がい者に対して偏見を持ったり、差別したりする人がいるのかわかりません。障がいがある人と出会うことがなかったり、関わることもない人。理解を求めても難しいと思います。それでも、その何気ない一言や態度がどれだけ人を傷つけているのか、一度考えてみてほしいです。そして、自分の行動を見つめ直し、思いとどまっしてほしい。そんな人が増えていけば、障がいがある人たちにとってどれほど過ごしやすい世の中になるだろうかと思えます。そのために、私にはこれから何ができるのか。私は弟に、認め合い、協力するという、大切なことを教えてもらいました。このことを忘れずに、生きていこうと思います。